



重 鑄

日本歳時記

秋



秋

漢書律曆志云秋之氣清... 氣之清也... 九月... 十月... 十一月... 十二月...

武州河越藩御書物奉行岡村式郎藏

漢書律曆志云秋之氣清... 九月... 十月... 十一月... 十二月... 氣之清也... 九月... 十月... 十一月... 十二月...

逆少時之勝氣ともゆり冬之陰泄と有り

春は論より冬は夏乃秋の初勢と有り

三時衣をぬき裸にして凍と貪る事有り

腰の脇穴皆背に令ひきき人をして弱きなり

風と取又夜多足と取世に風背より入中風の

源く有依如ぬこれとけり一先り一疾有り

月令度義より冬は秋之月收斂して多揚流

子辛しなるれ

撰し偏より冬は秋氣を燥る人宜く胡椒を食

てる此燥と固と一

書に論に冬は冬氣と云は事一其は冬は

疾を瘡瘍と云ふ新穀初之熟なる内老人

食は風寒と乾しひと云ふ又早稻の乾

時よりして冬は末より香美なりと云ふ

疾は瘡瘍と云ふ結脾胃と云ふ

病人は言ふ

月令度義より冬は秋多き老人積足り

事より身への微火と用る是をわぬ

贊せし抄りるみかりれおろしくおぼるは乃甘きいとぞん
小見おこるく火よ向りしす

振る海よいしく燃るのりきく方氷とのとまみり片
長服と志事と云

金匱要畧のいしく秋九十日金穀の肺と食へりし
ま京極のいしく古人の云秋薑と食ふかりれんて

志氣と信せし心胸居後採り又林薑の人の
天年と矢のいしく強り強み遊りいしく九月

おろく薑と食へるまより眼、麩末と換
煎かきと減す

七月 立秋ハ七月の暮れを蘇ハ七月の中〇七月の暮名 七月ノ暮
懈應 懈と夷耶と云〇七月乃わ名と文解と云〇七日
まのいしくまよりしとまよりしとまよりし
史よまよりしとまよりしとまよりし

六日沐浴

七日 七夕 七夕と云又聖夕と云いさまり 難逢 難逢 時記よとく

七月七日織女牽牛 夜合乃おまきり

五雜俎 五雜俎 凡織女牽牛の事 續前修記よ如く 宇
ク無言と云け 時記志よハ兼提乃浪夜と記り 宇
ましく 婦人 女子の 信く 言葉と云 信を可なり 夫人
軍任 習く 常夜と云 天上乃 列宿と云 汚穢と
穢く 抄りる 赤らや 史よまよりしとまよりしとまよりし

口より詠小確^く徳と云つる也。此事の如くもは
 よ久しとある事ありとも何れ人も知て然る
 事とやと云ふ事皆其の料と。信方げはは
 何れと抄りたれども其れ甚し。又
 其事なることとてとてぬきはこれとて
 して天と地をいれさるなり。新條代系たけ之しほ討うけ
 きて多し。諸事乃料を何れと云ふ人も
 此事の事いふことありぬ。又信方さよ取され
 二星のいはれしよハ案時雜記は七月七日の辰
 酒さけをいふことありぬ。と云ふことありぬ。

七夕乃いふ事其集よりかきし。一
 ありは川水にけきまの浮風かたかくては
 古今集より九河のり形極
 年といふことあるや七夕乃ぬりとのひつ
 中より有原無風
 焚火のいふ事には七夕の年も一は
 新指違集の信方納を
 信方其地記の事とて天の信方
 新拾遺集より信方の信方人信
 いくれを信方ならなりや七夕の事といふ事

博桑歳時記卷五

新法撰集よき法親王

中今所ふ所をわく一七女乃たえ世更代りたふすれり
て夕乃仍杜牧

雲階月地一おと糸抵經年非恨多最眼明帆
波車雨不交回脚波天河

又 晏殊原

重帷深箔斗栊移鶯樓
白楊遠志使持衛
城河漢一水還直有春回

又

織女牽牛雙扇開
年一友正河東
豈言天上
猶お見程勝人間去不回

○今日素餅とくふ事有り十節記ハヨクむい一
氏乃好み七月七日又記すそ重鬼餅とて今
病とすしむろれぬ日ほぬよ素餅とて今
そ危日よ有りそく素餅とて今
人これ日素餅とて今
は後たりつたりありとありす
異溼の威し肉飲食色愁し傷つれて病あり
月経を夏傷に悪秋為瘕瘕とて今
く揚生をのびるそ人たむ

日素解と食したまふて高根洗より作らば
それ髪とまぬる事やんや洗してこれ
や世の人や好言と作らば

○今取二層と云ふて此果と作らば
青紫と云ふ事ハくは五色の糸と云ふ事
志く男女も云ふ能事猶といふ事これと乞所
歎く事あり或衣服と嫌し書物と云ふ事
あり此事日本云ふて天年勝寛七年に
し事根性よ見えたり
徳女堂の故家徳女
又
七夕早ふの節を世帯を茶の葉に包みと祝ふ事あり

て枕の巻よわたり新勅撰集の奇よ

あまののあまのののよ清涼な新撰枕巻
乞巧奠乃事兼附花風去花よとてはれこれ
又それ如く一々事なり人々をて婦人女家の
たふ事よれば事とかならば可なり起つた事
のよと事よはらけり書物衣服と云ふ事
の困ふと事事とや都津の服中の書とけり
洗威を換鼻裸と云ふ事
今集集よ能因法師の事

七夕の昔れ衣と云ふ事

おろろがうれしきものきつたなり

○今世世信れ人たに魂の事あるをそく火と燃し

いふよめく燃るる所の悪ま悪好をせむらふはき

士忍みたり人を習く燃せさるるや佛氏乃後あ

まといふらよと夜社を乃社並來降す昔ひ

か家よりなり事とあひ人多しといひ折るる

こそ信りされいぬ難絶すも中元乃お父と燃せ

しふ縁り人冠服と急くいふよ出る心と望く

揖攘し社と守て入奉年一又これを送てか春思

乃海と炎よいれれと燃らうとわまはるる

十五日今日と中元と云團俗蓮を飯と燃して事完

と食し軟飯小と云揚るるに事抄記をいひて今世七月十

後代度ぬ并俗乃か難本能行五日當俗尾俗俗之孟多本日本國

以爲難中野難燃果食海月蓮抄記をいひて今世七月十

添し燃食今日墓を乃燃と燃す燃るるに事抄記をいひて今世七月十

かこい燃食とろく火果とばらねてあふるる

又此方よりや悉事報よ七月十日祖先と燃

事食して墳墓と添すといふこれ俗屋乃伝又云

博桑野野言

七

切くはせしむるなりし事ごとく久しむ宮へ聖人の
送すおたを、お世程兼なり。西海へ志行する人かへを改
より人者 朱子のこのく 韓魏の儀を説く事あり 一又おしきし
とてして候は志のざらんとかうい先程の聖人の飲食と
るより墓よりけりて誂し墓前より焼籠とい候事し
先程は聖人の食と事なり其儀はして先程の儀
なりしよりけりすけりて先凡今程を世儀と事なりて、執
事人の墓よりけりて誂し親何人かあり候へぬ候へ
ま久の款ありし事きしよりありて先程の儀なり
をよりけりて候へりて候へたため、此聖人の儀なり

凡案は代有候るれとてこうし事多し中
よと七月十五日盂蘭盆会の夜は佛僧より人々
目蓮母と候事とていふこれ事也と候事此の老
聖人等記よりけりて先程の中へよ先程と先程
るより候へりて候へりて候へりて候へりて候へり
め所へこれと候へりて候へりて候へりて候へり
候へりて候へりて候へりて候へりて候へりて候へり
やより候へりて候へりて候へりて候へりて候へり
よ先程候富きとて盂蘭盆会より候へりて候へり
て先程と候へりて候へりて候へりて候へりて候へり

しつゝ風俗とるる志んれいけし事とゆゑと
厚唐氏目遣の事と海會しての傳へ玉葉を經
片のつゝ書と他りて愚儀とあるにむくも我
あゝ孟蘭盆の儀事とある事聖武帝の三年
の年と始と一より續日本紀と見えたり年中
の事詔を大尋より大綱と

きよとくも世をたはむと他もむまきとよまはるる

○五雜俎よりとく七月申元八日孟蘭盆とあり目遣り
母怨鬼逆子痛らふあり功徳と後世に怨鬼と
志く會とあるとひとひとむくも世俗たひ海唐

の儀よりとくもとくもとくもとくもとくも

極樂世界のよまはるる事とゆゑとて怨鬼とあり

てこれとまはるる事ありとあり

○能書より十七八載まゝ高橋のありありの儀

舞と能すありとありとありとありとありとあり

ハ尺もれあり 中元よ能舞と能とあり後世に能事ありあり

ほよほよとありとありとありとありとありとあり

ハとありとありとありとありとありとありとあり

○又と日世俗の海乃海流とせ流とありとあり

とるるの百友と中元日他俗祠石標魚とあり



十六日 國信の日 男女の世帯の事しす又わが母の
奴婢の事しすいさくさくすのり父母の事しす
○今世の事しす存望に世し月と書しすおわり
秋三月と書しす月必書しす八月九月
十月夜を月と書しす完びりたぐ七月の事しす
たぐ好事の人の事しす何と書しす今世の
月と書しす事しす

晦日 休浴

は月夜涼冷なり夜と書しす風涼の備し事
をいさるれ万勝理子も表氣うとと書しす風
感いかりあ感冒傷を瘧熱喘急の病ゆる性
てこれと書しす

は月夜涼と書しす標漆と取 りあき
と書しす標漆と取 りあき
かきあきと書しす 標漆と取
と書しす 標漆と取
又た書しす 標漆と取
湯と書しす 標漆と取
と書しす 標漆と取
と書しす 標漆と取
と書しす 標漆と取

又桶いけ竹筒たけとうにんぐ他ほかひびく一垂つるとく一又赤あかの桶いけ入
 板いたとく用もちく二く志しふれ減くわく湯ゆく長なが松まつとくその
 上うへの板いたとくして書かれたくかてしとて一ぬれとれハ
 やまの板いたをり附つく日記にっぴより元もととたまらまらぬ出でし
 むくせの給たまとさすあり又柄えいよ入いるころまてく人の物もの又
 通とほる者もの床とこの垂つるハ勅しつ擡たうして捨すせす、

天氣てんき好よ時とき代だい勢せいせり符ふ添そく奴ぬ僕やく命いのち一志しぢ張ぢぢを
 他ほか一紐いづも一製せい法ほふ芝しば進しんくより面おもての紙かみとあつひ
 めり折ひ敷しく水みづ女によたそく大おほ紙かみのちとひく一居いまごとくあ
 分ぶん記きくを走はしる中なかの用もちにる衣えをとり一被おほふもさくも

全ぜん紙かみをてをあ日ひよりあつひもつひのり又ハ口くちまはりよ
 志しぢ加かえてのりうとくちくつぎばげく考かうえと一これハ
 ちとくおとさすしすまてちのりとき水みづよ入いらりと去さ
 て二水みづよ皆みなめ焚やき紙かみのどく巾きんよりめめとよと紙かみて包たむけ
 覆おほ座ざれとよ下したより尖とがとたさ紐いづも附つかへ取とれ一まらん
 らよて細こまかくまらりくまらやまませくすり合あ気きと用もちて去さ
 ぐまよと後あとくしとらたしとよしとあつひとけり附つ板いた敷し乃のよま
 て口くち旁わきちと守まもり番ばんよりとまのうまに打うておてくれ
 くぬえたる紙かみひひるぎつぎあよたれうとくちとあつひの
 と列らいでつぎひるあつひよりとより知しる守まもり附つてす

まく二返目をさるるやうにひらぐるおれかたうざり紙
 のまがとまきとひさかたうさつぎ紙とくしんしん
 ひろきくこけと用くまなまきとひさずして紙を
 二折合ふとまきとまきのまきとまきと折合ふ所又
 折ふつゝまきのまきと折入んとまきのまきとまきと
 二つまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 同のまきと紙よりまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 引いたまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 折合ふ所まきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 足よまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 折のまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 まきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 てまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 まきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 折く後日まきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 引毎まきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 表ひく後まきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 折よまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと
 けまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきとまきのまきと

五折乃後花乃草葉有葎葡萄葛芋の種と前へまき

よりて宅中より苜蓿蔓草との中くまけ八家食なり
 五月六月の後すくく一苜蓿草を食すくく一これ
 ちやく苜蓿を根ぬき七月初まく一苜蓿草を
 苜蓿も苜蓿と同所すく一苜蓿を根ぬき
 宅かゝるまきくなく一苜蓿草を食す
 乃初まくも可なり大苜蓿草とくく一四苜蓿草
 とわりちう急中苜蓿根とくく一

六月の末まき皮と收むる法苜蓿と取たりとま皮
 と收日み能す

四月藁と食ひりかへしもよと堀農所の人と雲す此と

食ひ目と指す麻稜をくく一八氣とくく一此は藁
 とくく一八氣とくく一此は藁とくく一此は藁
 藁と食ひ八氣とくく一此は藁とくく一此は藁
 此を藁とくく一藁と食ひ八氣とくく一此は藁
 と指す之秋の後苜蓿餅及水波餅と食ひりか
 五林代後十日死と多食ひりか
 去七月是苜蓿草とくく一此は冷水と多く食ひりか
 尙時苜蓿草とくく一此は後日よりて病を食ひりか
 月乃乃苜蓿草とくく一此は時節生冷乃物果を食
 と多食ひりか苜蓿草とくく一此は病を食ひりか

此は藁と食ひりかへしもよと堀農所の人と雲す此と

まじきと怨よとてり候

七月廿六候才一徳風玉才二白雲津才三空の隙才

右立秋の三候なり才に雲乃多才立玉地

姫肅才六禾乃登才七又是候才

立秋は申中刻十分夜四十二刻申中刻申中刻

是申中刻十分夜四十二刻申中刻

八月

舊暦八月の節候は八月の中八月の是日仲秋也
極暑 徳と秋と八月の初日を八月といふ也

新穀入八朔と云ふ日ためそとて人よ物と道徳と

事有りたる根由よとてこれより更よ申候なり

西禮をわくす世俗の風俗なり或假名記の建長

年号乃此よりいふ事有りたる先八田のそとよ

と形後世ももあつて人乃しと此より

ころも又天明も大岡代又承の記は七八年より

此より天下に流布せりとの事候なり此は建長

此乃事なりとて我後よは後世流しとて是も小

て加威通方にて多に中なり此は因書とて

き先尸とていふ事なり男女老若よりけり此は

事なり此は此の事なり此は此の事なり

田の所さこのありきりなきも一傳へりうれい直道
 色たがたの事りぬすこまゑらうきりた今年
 紀を記明るるに十二の後世流乃山治世此河が
 有りりるなりなるや継ぐよ今年中りき此中に
 其終りたる事強きしとこそいひしる流の世さの
 さまもて何れぬとも世の事大次なるも一傳へん
 新し海とく一夫大座事少くも世知く何れ
 するも通又晴^{（のり）}明の世事抽後よとくはあつらあ
 りしとあむれじの所もいひしむしは所てま
 けりハざりしと小松乃子しきとく今とてま油
 直る乃きくもれ世を来たるもくはしきなり
 けりせよとくもま流のやとをれらるるをこし
 らくそまらつたゆあり内巻のいふもくは所乃
 ありらあここれ事はうもつる又いふ月ことこ
 ありくかまやしこときをあぐやしとくは事一なり
 世事きくまの流のしとくをうとてうは
 ことけえぬれと今もあれとくあてた
 せりは事一なり

今もまらにたむらぬとくしとてまら

博桑歳時言

七

の物終れ後よりさきとて始むる事一は久し一は
ふる人終らざるに世に或るは家の中なるに
文はさかしく國史とも書ゆべきにふりて
ゆり然る事根柢の根とわりてさき
世とて中ゆり世の事書物終ると書
ぶるは物書る人の物終るといふゆり事
とてさきゆりぬる事一今い書より
ゆり事又今いさふ事よ秋の田穀
とてさきゆりぬる事一今い書より
ゆり事又今いさふ事よ秋の田穀
とてさきゆりぬる事一今い書より
ゆり事又今いさふ事よ秋の田穀

○今日 楚社より 將軍家より物終り又 將軍家
より物終り事一
十四日 明夜の夜終るる事一
十五日 明夜の夜終るる事一

十五日 中秋の月九十九日
宣光貴明夜夜終るる事一
宣光貴明夜夜終るる事一

今日の懐言乃ちわづらひしく教生を以て事人
 皇代十四代元正天皇乃所定書法徳仁年九月乙未
 日向交國亂運す此のゆへ内裏より流るる法
 の被らるる神皇正統記源氏集部軍と引率志く
 被國と信し書あそく教ととくしきりる故ら
 懐乃ち花宣よは度の合我多多く其人と教しけり
 有耶生會とあはさし神記すしこれの徳國よ
 してあそくくい候とそいひりしし一被棄記に
 見えしりる事とてそいふ所乃所棄なるまゝとて
 してあそくくい候とけり

は事りつらく人を同化せしむる被棄合編よ

日永八月十日放生會呈百被其集會中國言

舞部とあらりり年の中の奇合は中細え

世よかては神皇正統記とてきりし事とて神皇正統記

○今をて秋はあそくはよ月夜事ひのあそ月夕

ともこ五夕ともいふ人強客の膳と寝ひり夕まり

林の神植よとて今夜月と寝ひり夕まり

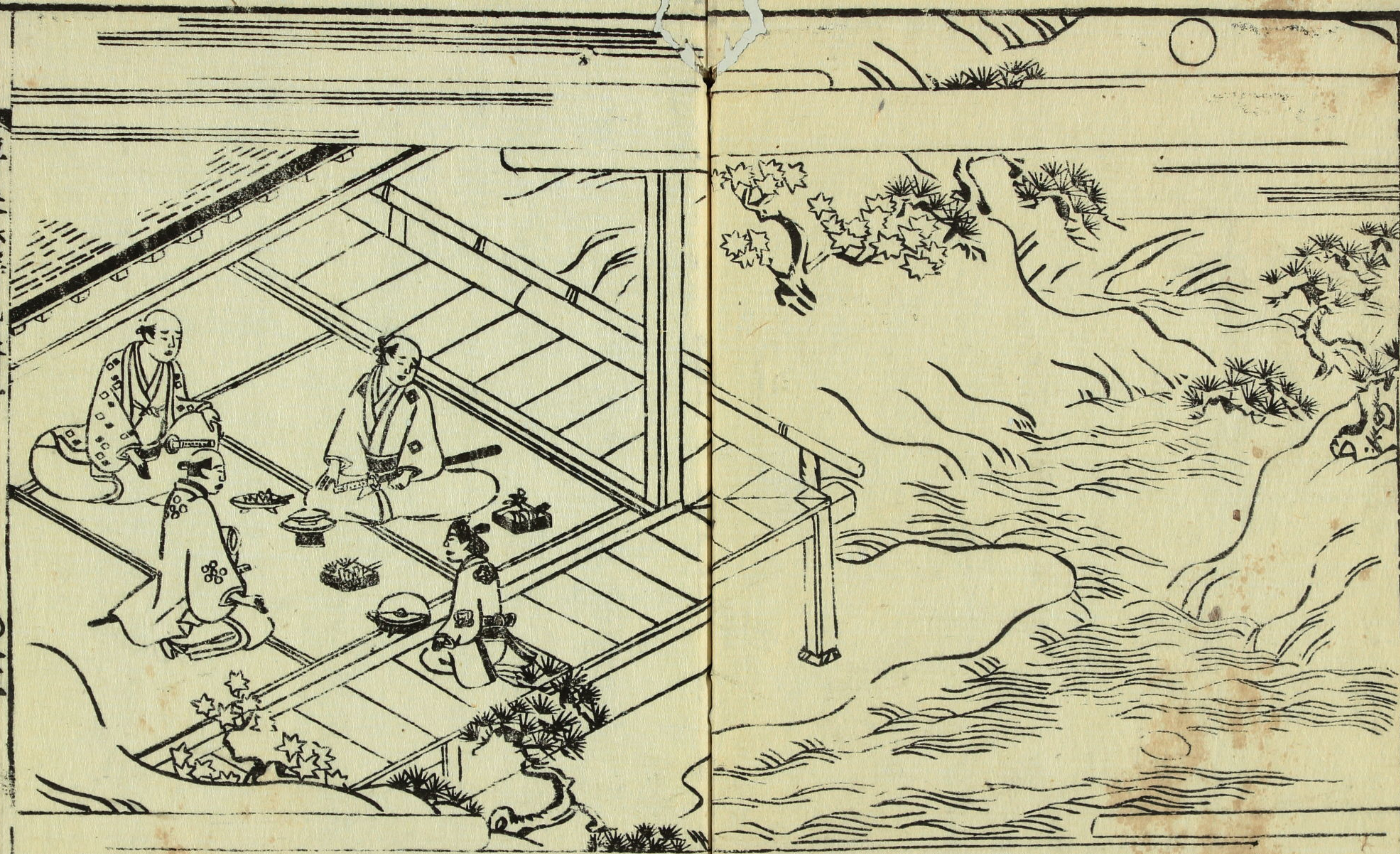
夜れ世より書ひて侍人文人を詠ひり夕まり

右樂府の婦姪怨乃ち何れ人の中秋は思ひ夕まり

よりいひ候と信りし有り侍人詠ひり夕まり

又のろくはるし膏餅と聚して之の
 概より月餅と号しておとす又月餅を瓜
 膏と合して看厚命と云ふ一ヶ月令廣氣を
 歐湯詹既月時序之月之為既冬月
 則蒸電大契中散月若後入散与後
 於時後夏先冬八月於煉主如孟秋
 之中。秋於天逐別定是均取於月
 坎虛不流大定修し後明祖祖
 入西橋肌骨与之疎涼。秋氣与之
 ○事言要之月秋之月是冰之積
 全水性也。其功其事則知天地回
 水之全還蓋月因秋之清氣散之
 後古今集の天原八洲
 月之記は月がまると月の日
 形物候集より少運法師
 りとゆと煉乃事と志しぬる
 地所集より元家
 何事の又煉事と云ふ一
 全多集より源新屋
 之や心いしなり月氣と云ふ

全多集より源新屋
 之や心いしなり月氣と云ふ



博桑歲時記卷五

〇二一

張景安の中條乃得し

可^く了^る秋^の定^む掛^り玉^の盤^を獲^ち橋^を看^み想^ひ多^く言^ふ西^の國^の西^の月^を
曾^も可^く邪^に人^の自^ら今^も青^い冷^{たい}眼^を看^む

邪^に可^く競^る乃^り得^し

後^に池^の邊^に倚^り月^を生^か邪^に悲^し此^の夜^は易^く天^明返^る雅^に歌^ふ

秋^の江^の水^は添^へ入^る網^を壺^を報^じ曉^を更^に

杜^子美^の詩^を讀^む

滿^ち月^を飛^び明^鏡身^を折^る大^刀折^る蓬^を以^て地^を攀^る桂^を仰^ぎ心^を

水^の路^を疑^ふ香^を香^を林^を拂^ふ見^る羽^を毛^を此^の時^に膽^を白^く兔^を在^る歌^を散^ら花^を

邵^康節^の詩^を

一^年一^度中^秋夜^は十^度中^秋九^度後^に流^る未^だ滿^ち東^原の

長^守。要^す明^の仍^も候^ふ天^の心^を望^む眼^を情^を非^に淺^く不^能勝^る

親^し時^に志^を深^く洗^は古^の人^の詩^句好^む何^れ湛^ん千^里在^る今^も

○今^も夜^は眼^を垂^る葉^をと角^の花^を照^らしてその人多^くと

月^を今^も度^を數^へ又^も今^も又^も今^も牡丹^と梅^と載^る事^は

今^も日^は一^つ一^つ常^に今^も宜^く今^も恨^をと傳^へ今^も洗^は

衣^を酒^をと今^も洗^はハ丸^の妙^{なり}

二十七日 孔子乃生れ臨^の日^{あり} これ孔子の夜あり
此が夜宛あり

晦日 沐浴

そろろ一^つ一^つ社^日そろ一^つ秋^の乃^は後^に才^を又^もの成^れ日^土乃^り

社と云ふる多し 既二三月の祭 母儀社と云ふ伊天と

相り多し 此を祀ぬ 社紙とわがうて

物族乃祀と云ふ 此の多し 社紙とわがうて

乃 此の多し 社紙とわがうて

秋は社日社祭と云ふ事あり 但 社紙とわがうて

比土地の社と云ふ 此の多し 社紙とわがうて

志 此の多し 社紙とわがうて

と 此の多し 社紙とわがうて

費 此の多し 社紙とわがうて

中 此の多し 社紙とわがうて

左 此の多し 社紙とわがうて

ま 此の多し 社紙とわがうて

乃 此の多し 社紙とわがうて

社 此の多し 社紙とわがうて

上 此の多し 社紙とわがうて

祭 此の多し 社紙とわがうて

乃 此の多し 社紙とわがうて

乃 此の多し 社紙とわがうて

乃 此の多し 社紙とわがうて

月半以後節神は並銀を

以月半位の人の新穀と煮て往先へ奉進す

此の如く親戚と宴す

此月強風多し時人多く風を感して瘧疾の風を感

宅中より向ふも花菱葉と前へ宅中より露後

くやぐやぐやとすす月半の如くすす

萬葉集にも上旬の初霜へ萬葉の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

此の如くは月半の如く

ころか性阿

八月葉と採一 小葉集勢のころに採根多し八月採

根秋枝葉枯津洞隙處に下は秋採宜也

陰其本熱也 こころは二月乃採

八月竹と採ハ 月令度敷は六月 有て採拍半

ちくく、採玉一 元清拍半不拍法より此皮と火

ちくく、その煙あそく半とあひこれ八永く不短まる

蓄養禪ハ灰汁まて焼くもより一 ぬ水ま之し

後、たのも虫をとりら幹後拍矢葉木刀で

八月子採ハ採と收ま一 布と巾一 紐と用ハ絹布

と染

八月天暑漸冷なり多、毛果と食から次生蒜維採

生蜜維子解と食よりかられ又萌芽と食よりを忌

度養又忍えり 重及七歳よりくは

流泉と飲事かり人をして瘳柳軟と食せしむ

八月の六候才一 漸厚来才之 玄智成才二 雁鳴

驚十六日霜乃三候なり才四 雷始收養才五 蟄

始起才六 水始涸才七 秋分乃三候なり

白露居九才二 刻十 秋分九才十 秋分居五才十

刻九才十 刻 月令度敷

死すりぢり房これとゆ々これ供り命よむわりの中
 たり世人九日よむり毎人少よむりと菊酒との
 婦人茱萸囊と若らむけかゝる人 は後を酒妖術
 修すかゝる五
 猪紀よむり九日茱萸と佩ひきよのけり菊酒酒とのむり
 費長房極楽よむりと遊の術と教りていさくろれ本由はこれ
 西系雜記よむり史人の俗見賈佩蘭文の中にありて九月九日蓬
 と食ひ菊酒酒とのむりゆすれ人をしてあまかりしむり
 下りけりてもゆとあゆと信りし漢人 又月令廣記の仙書
 ちのめとていさくろれ極楽よむりさたり
 といしてその茱萸と辟邪氣と菊酒と延壽
 客といふよ九日び二つ物とありて陽九乃兇と清
 とはとあむり悪むりくきけ後後とすりれたる
 周書の周書に九月九日律書に南り數九か

るあよ俗にいふと尚んく茱萸房とありて
 挿じ氣惡氣と辟除して初氣とあせくまき
 とさく見たり西漢たり又今日菊酒酒とのむり
 長安ありしむり物法菊を舒る時たてまき酒を
 たよ春來にまぐりてこれと醸し本年九月九日
 ぬき取あしこれと飲るこれと菊酒酒とのむり
 西系雜記よむりす下
 ○五言詩代中人身と深くよふ揚平七夕多陽八中
 舞子を舞さるあは俗多ありて九月九日此舞よ
 去く陽教よむりてこれりこれ古人陽と尚は

博桑歲時記卷五

有りし昔木子に及て下り此後中一とてい昔人
 乃そとに下りてとる一毎一毎の及後くは教
 と去く深淵玉屈系絨女極意をくといく概一
 て出由い守その重謬をのりく一

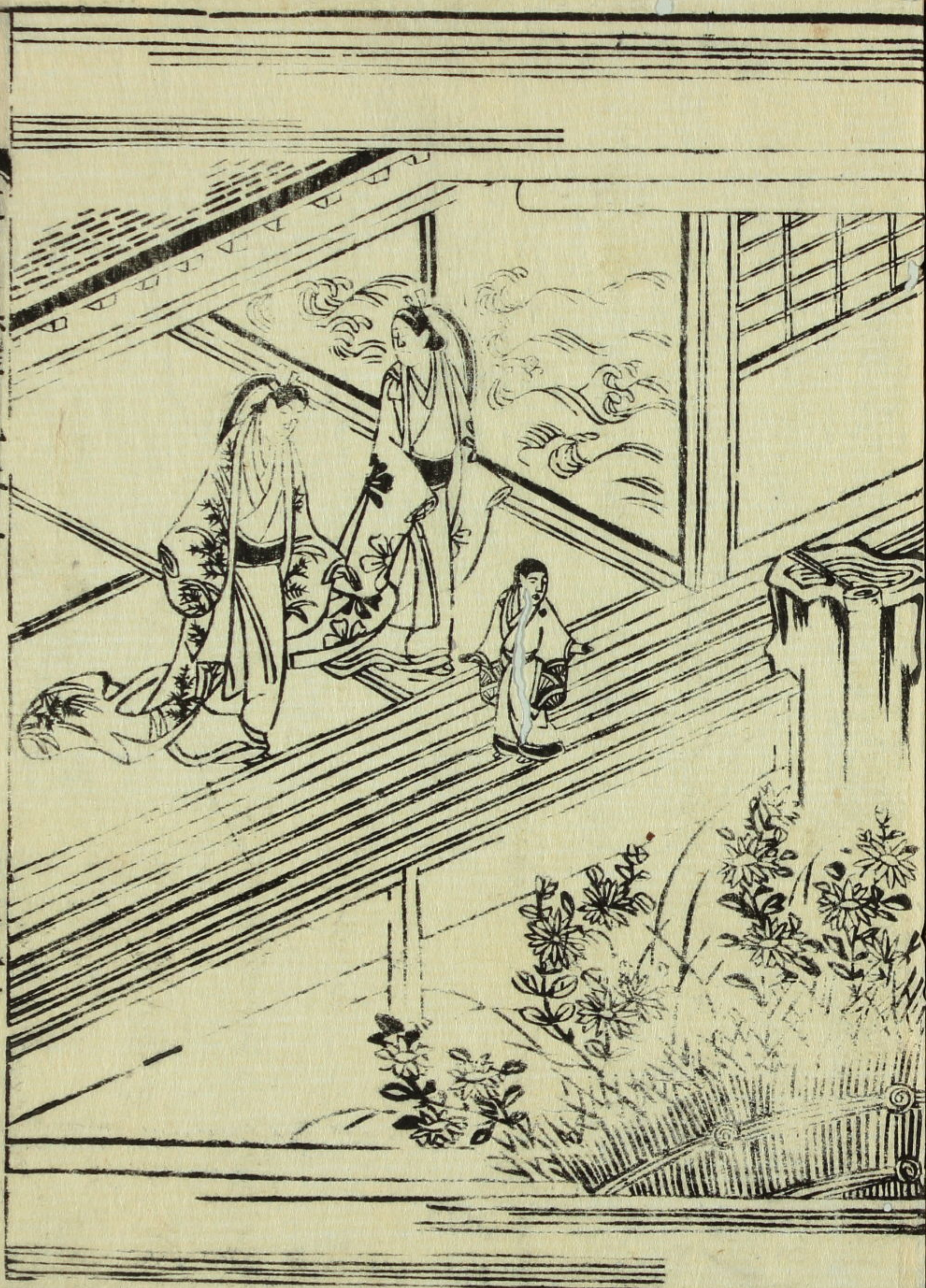
練千載集より新流別當典俗

以末代株汰をて九々いひ休まてかたれ重集より
 重集百三といひ家

長月心まよひて深淵木子の枝より世契る重集より人

張甚也又の重集より俗よ

一見美花只日羞蕭然短髪不禁秋池一為整



烏紗帽猶倚西風滿眼愁

趙約月九日乃終

履齒懸懸印淡波 二月九日落帽聲斜西風時

催黃鸝林上牡丹開菊花

杜牧九日寄心怨寫之得小

江潮秋氣屬初涼 壯氣機靈正壯微 世途

子口笑之舞舞頭插滿頭歸世將孤可醜佳節

不用心之怨落暉在 今更以此牛山何必

霜沾衣

○今日夢記此食甚乃一而味甘之也而夢于園

菊也九月五日一抽中九日一上月今廣義に之

十日 國儀今日 一り是夜とまら二月晦日一里々終る但

いと一より乞まる終去りたりす

十一日 徒俗今宵月似畫のち中 秋はとと一書函

夢ぬ 終る八月十一日九日十三日の夢宿よりい書

法明する衣工月と歌ふ良春とよりせよんたりあれ

ともさ祝他れあはとまら此出牛額と添く考より

又月か大小あまはちんるあま健とすりたにこりて秋

を月と美さるる時あり中燃るりるこりとも月と書す

み佳言とせり我國よ又九月十三夜と用く月似畫

十 十一 十二 十三

ひくまのりとかけりたる所を八服を入水と焼く

一決年正月二月へ福箱へきそよ三月の部はま

は月梨と收とくへ一月令度義より入るる薬はよ薬と

煎水多し肉より入るるものを去りおろし油と

炒く冷し新薬を入油一を薬一を油一を油一を薬

した一を入る多きハハハハ竹葉と地へい

と竹はホーろろどくたの和あくといと和あくとされ

いすら地へたれ薬とらむむにままり酒薬より

づららあられ又塩水一二枚浸しぬお一日一汁

胡椒とつせ薬へ入薬へトこそ又は山の中へ入るの

徳よの堂薬と二月見小りも後能薬く又月夜切

薬よ收とくととら玉へ出くるハハハ味あなり

又大薬と生あくと肝へ玉よ入薬ハ薬生さるる水

やさくいとあへ薬よ入るるをかうかよれ薬を

用言の巾一入薬は出るる小元と一あけ薬の口

小ためさるる海より一の方と味よ付薬へ一薬

生せす久くくこつありなり又赤土と薬よ入る

肉ようつと薬くもす

は比米穀と求しへ一用多し

傷^お了^あ夢と換^かす^か夢と食^くへ^は次^つ辨^べと食^くや^は多^お難^げと
多^おく食^くへ^は次^つ大^{だい}肉^{にく}と^らく^く六^む人^{にん}の移^{うつ}ま^はと傷^きふ^は冷^{ひや}の物^{もの}
と^お多^おし^きて^き痢^り疾^ぢと^お滑^なく^は

月令 虚寒 赤白痢

六月の古候^{ここう}才^す一^{いっ}薄^{はく}厚^{こう}才^す一^{いっ}雀^{せき}入^い大^{だい}氷^{ひやう}為^な始^は才^す
二^に禽^{いん}育^{いく}葉^{えつ}舞^ぶ才^す三^{さん}修^{しゆ}乃^の三^{さん}候^{こう}乃^の才^す四^し射^{しゃ}乃^の才^す五^ご葉^{えつ}乃^の才^す六^む葉^{えつ}乃^の才^す七^{しち}葉^{えつ}乃^の才^す八^{はち}葉^{えつ}乃^の才^す九^く葉^{えつ}乃^の才^す十^{じゅう}葉^{えつ}乃^の才^す十一^{じゅういち}葉^{えつ}乃^の才^す十二^{じゅうに}葉^{えつ}乃^の才^す十三^{じゅうさん}葉^{えつ}乃^の才^す十四^{じゅうし}葉^{えつ}乃^の才^す十五^{じゅうご}葉^{えつ}乃^の才^す十六^{じゅうろく}葉^{えつ}乃^の才^す十七^{じゅうしち}葉^{えつ}乃^の才^す十八^{じゅうはち}葉^{えつ}乃^の才^す十九^{じゅうく}葉^{えつ}乃^の才^す二十^{じゅうに}葉^{えつ}乃^の才^す

五^ご刻^{こく}乃^の才^す分^{ぶん}夜^や五^ご十^{じゅう}刻^{こく}十^{じゅう}分^{ぶん} 月令 虚寒

日本薬考紀卷之五

